杉並区の外国ルーツの家庭の暮らしと子どもの学びに関する
調査報告書

2025年3月

特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ジャパン

まえがき

2024 年 12 月現在、杉並区の外国人人口は 19,178 人です(令和 6 年 1 月 1 日現在)。外国人および外国につながる人々はコロナ禍終息以降微増傾向にあります。多様な背景をもった外国人および外国につながる子どもたちが区内で暮らしています。

本調査の実施者である特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパンは、世界の子どもや家族の福祉の向上を目的に国際協力をおこなっています。また国内事業として、杉並区の地域で暮らす外国につながる子どもたちを対象に、学びのフレンドリースペース事業を始めています。このたび、さらに外国につながる子どもたちの直面する課題を探るために外国人保護者や外国人に関わる団体・機関を対象に調査を実施しました。

本調査報告書は第 1 部アンケート調査実施報告、第 2 部インタビュー調査実施報告から構成されています。本報告書をとおして、外国ルーツの子どものいる保護者の声をお伝えできればと思います。対象を絞ったこともあり、アンケートの回収数は限られましたので、これをもって区内のすべての外国ルーツの子どもの親の意識や考えを反映するものではありません。忙しい時間を調整して、アンケート、グループインタビューおよび個別インタビューに当事者の立場からご参加いただきました。

本調査研究の実施にあたってご協力いただいた地域の外国人区民の方々、また、区内の団体・機関の皆さまに心より感謝を申し上げます。

本調査研究は、ルーテル学院大学研究倫理委員会の倫理審査の承認、および協力を得て実施されています。また、本調査研究は、社会福祉法人中央共同募金会「外国にルーツのある人々への支援活動応援助成」の助成金を受けています。

調査研究チーム：
チャイルド・ファンド・ジャパン　武田 勝彦、栗原 理恵
ルーテル学院大学　原島　博

もくじ

まえがき II
第1部　アンケート調査編 1
第1章　調査の目的と概要 1
1. アンケート調査の目的 1
2. アンケート調査の概要 1
第2章　調査結果と分析 2
1. 回答者の基本属性 2
2. 来日の目的と職業 3
3. 在留資格 3
4. 日本で一緒に暮らしている家族の構成 3
5. 親の言葉についての意識 3
6. 生活についての親の意識 8
7. これからの杉並区での居住についての意識 12
8. 子どもの教育についての意識 13
9. 自由回答 18
第3章　第1部のまとめと課題の整理 19
1. アンケート調査のまとめ 19
2. フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）のまとめ 19
3. アンケートとフォーカス・グループ・インタビューから見える課題 20
第2部　個別インタビュー調査編 21
第1章　調査の目的と概要 21
1. 個別インタビュー調査の目的 21
2. 外国ルーツの子どものいる保護者個別インタビュー調査実施概要 21
3. 支援団体・機関関係者個別インタビュー調査実施概要 21
第2章　保護者個別インタビューの実施と結果 23
1. 保護者個別インタビュー対象者 23
2. 個別インタビューの要約 25
3. インタビューから見えるニーズ 30
第3章　支援団体・機関関係者個別インタビューの実施と結果 32
1. インタビュー先支援団体・機関と実施日 32

2. インタビュー結果 32
3. インタビューから見える対応状況 34
全体のまとめと提言 36
1. 外国ルーツの子どもたちの学校などでの日本語習得の機会を充実させる 36
2. 外国ルーツの親の日本語習得を支援する 36
3. 外国ルーツの家庭と学校などのつながりを促進する 37
4. 外国ルーツの人々のための暮らしの情報へのアクセスを支援する 37
5. 外国ルーツの子どもや家庭の、地域の一員としての交流・参加を促進する 37
おわりに 39

第１部　アンケート調査編

第１章　調査の目的と概要

1. アンケート調査の目的

外国ルーツの子ども（16歳未満）のいる家族の生活状況を把握して、特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパンが、今後杉並区内で外国ルーツの子どもと家族を支援している民間団体や行政機関がつながりをもち、連携を強化していくための調査である。

2. アンケート調査の概要

(1) 調査の設計

1) 調査地域：杉並区
2) 調査対象：杉並区内に居住する外国につながる子どもを持つ保護者
3) 抽出方法：協力者／団体による該当者への依頼

(2) 調査の方法

1) 実施方法：Microsoft 365 FORMS を用いて、配布および回収をおこなった。
2) 調査期間：2024 年 3 月～6 月
3) 調査票：AI 翻訳ツールを用い 6 ヶ国語（日本語、英語、中国語、韓国語、ネパール語、ベトナム語）に翻訳後、それぞれネイティブチェックをおこなった。
4) 調査項目：1)回答者の属性、2)親の言葉についての意識、3)生活についての親の意識、4)これからの杉並区での居住についての意識、5)子どもの教育についての意識、6)自由回答

(3) 調査周知・協力依頼　杉並区交流協会、エベレスト・インターナショナル・スクール、 SNS 広告宣伝など

(4) 調査票回収結果　51 件、N＝有効回答数

(5) 分析方法　単純集計、クロス集計、FGI（フォーカス・グループ・インタビュー）

注：11 月 4 日、杉並区内に居住する外国人区民に６人（中国：女性 2 人、台湾：男性１人、ロシア：女性 1 人、カナダ：女性 1 人、フィリピン：女性 1 人）に集まってもらい、アンケート結果を踏まえてグループ内で意見交換をおこなった内容をアンケート結果分析に反映した。すべての参加者は子育て中である。

第 2 章　調査結果と分析

1. 回答者の基本属性

(1) 性別：男性（26 人）、女性（25 人）、無回答（2 人）

(2) 年齢：40 歳から 49 歳が 25 人、30 歳から 39 歳が 18 人と続き、50 歳から 59 歳が 4 人、60 歳から 69 歳が 2 人、70 歳から 79 歳が 1 人

(3) 国籍：ネパール（20 人）、台湾（6 人）、イギリス（4 人）、アメリカ合衆国（3 人）、フィリピン（3 人）、中国（1 人）、韓国（1 人）、ベトナム（1 人）、日本（1 人）。

※ネパールの方々の回答が多くあったことから、全体の回答結果には、ネパールの回答者の特徴が現れている可能性が高い。

回答者の国籍	N	%
1. 中国	1	2%
2. 韓国	1	2%
3. 朝鮮	0	0%
4. ネパール	20	39%
5. ベトナム	1	2%
6. 台湾	6	12%
7. アメリカ	3	6%
8. フィリピン	3	6%
9. イギリス	4	8%
10. フランス	0	0%
11. タイ	0	0%
12. 日本	1	2%
エルサルバドル	2	4%
ヨーロッパ	2	4%
インド	1	2%
イタリア	1	2%
メキシコ	1	2%
ニュージーランド	1	2%
アイルランド	1	2%
オーストラリア	1	2%
カナダ	1	2%
総計	51	
「ネパール」(39%)が最も多く、「台湾」(12%)の順になる。		

2. 来日の目的と職業

「仕事を得るため」(22 件)、「勉強のため」(14 件)、「結婚のため」(9 件)、「自分または家族の転居のため」(12 件)、「日本で生まれた」(3 件)、「政治的自由のため」(2 件)と続いている。「その他」の回答が 9 件あり、来日した背景にも多様な理由があると推察できる。

回答者の現在の職業は、自営業(12 件)、マネージャー(2 件)、専門技術者(1 件)、事務職(11 件)、技能実習生(1 件)、主婦／主夫(12 件)、学生(1 件)、失業者(3 件)、その他(8 件)であった。

3. 在留資格

「永住」(11 件)と「専門家」(11 件)、「日本人の配偶者または子」(7 件)、「永住者の配偶者もしくは子」(6 件)、「熟練労働者」(6 件)、「学生」(1 件)、「特別永住者」(1 件)の順位になっている。

4. 日本で一緒に暮らしている家族の構成

「父母と子ども(2 人)」の回答が 36 件、全体の回答の 71%を占めている。「母親と子ども(2 人)」は 5 件、「父親と子ども」の回答は 2 件あった。「その他」に回答した件数は 9 件であった。

5. 親の言葉についての意識

(1) あなたが日常会話で使用している言語を教えてください（質問 1）

回答は、「日本語」(31 件)、「英語」(28 件)、「ネパール語」(17 件)、「中国語」(8 件）、「スペイン語」(4 件)、「フィリピン語」(2 件)、「韓国語」(1 件)、「ベトナム語」(1 件)、「ヒンディー語」(1 件)であった。日常会話では、日本語と英語を使っている割合が最も多い。日常生活において、母語を含めて複数の言葉を使っている。

FGI では、「みんな中国人なので、やはり家では中国語の方がいいです」という中国の方の語りから、母語が家庭内で使われていることがわかった。日本人の夫を持つフィリピン人の方は、「日本人の夫は英語で話すので、日本語はあまり使わない」と回答していた。日本人配偶者がいる外国人の場合でも、日本語をメインに使っていない場合もある。また、夫婦ともに日本語を得意とする場合、子どもとの会話は日本語を使っていることがわかった。特に、子どもが地元の保育園や公立の学校に通う場合は子どもの日本語習得が早いため、家庭でも子どもとの会話では日本語を使うことになる。対極の例として、乳児のいるロシアの夫婦は、家庭内ではロシア語を使い、職場では英語を使っているため、日本に数年住んでいても、日常的に日本語をほとんど使わない。

家庭内での言語コミュニケーションは様々であるが、すべての FGI 参加者にとって、地域での生活で日本語は欠かせない。ただし、スーパーやコンビニエンスストアでの買い物ではセルフレジが増えているため、従業員と会話をする必要もなくなっている。生活は便利になっている一方で、日本語で会話する機会が地域で少ないという意見があった。

問１　あなたが日常会話で使用している言語を教えてください。（〇はいくつでも）	N	%
日本語	31	33%
英語	28	30%
ネパール語	17	18%
中国語	8	9%
スペイン語	4	4%
フィリピン語	2	2%
韓国語	1	1%
ベトナム語	1	1%
ヒンディー語	1	1%
総計	93	
日本語(33%)が最も多い。次に、英語(30%)の順になる。		

（2）あなたは現在、日本語を学んでいますか（質問 2）

回答は「はい」が 25 件、「いいえ」が 26 件であった。質問 2 で「はい」と回答した者に対する日本語学習方法についての質問 3「あなたは日本語をどのような方法で学んでいますか。」への回答では、「自分で勉強している」が 8 件と最も多く回答されている。「家族に教えてもらっている」が 6 件あり、家族同士で日本語を学び合っている。また、「日本人の知人・友達に教えてもらっている」（3 件）、「通っている学校や大学で教えてもらっている」（2 件）、「ボランティアの日本語教室に通っている」（6 件）、「語学学校（日本語学校）に通っている」という回答が 5 件あり、日本語教師から学ぶ選択をしている者もいる。回答者の半分近くが自習学習に取り組んでおり、家庭内で日本語を使う場面があることがわかった。

FGI 参加者から「自習」について、自宅でポッドキャスト（日本語学習ラジオ）やネットフリックス（日本語番組）などを利用していることがわかった。ポッドキャストは、日本語や日本の生活習慣を学ぶことに役立っている。また、自宅に居ながら日本語を聞く能力を高める上で助けになっているとの意見が多数あった。またネットフリックスは、会話表現や日本的な価値観を学ぶことができるという意見があった。

質問 2　あなたは現在、日本語を学んでいますか。	N	%
1. 学んでいる	25	49%
2. 学んでいない	26	51%
総計	51	
学んでいる(49%)、学んでいない(51%)、ほぼ半々になる。		

問３　問２で１に回答した人（現在、日本語を学んでいる人）にお聞きします。あなたは日本語をどのような方法で学んでいますか。（〇はいくつでも）	N	%
1. 自分で勉強している	8	27%
2. 家族に教えてもらっている	6	20%
3. 日本人の知人・友達に教えてもらっている	3	10%
4. 通っている学校や大学で教えてもらっている	2	7%
5. ボランティアの日本語教室に通っている	6	20%
6. 語学学校（日本語学校）に通っている	5	17%
総計	30	
「自分で勉強している」(27%)が最も多く、「家族に教えてもらっている」(20%)と「ボランティアの日本語教室に通っている」(20%)の順になる。		

(3) あなたは初めて日本に来た時、日本語はどれくらいのレベルでしたか（質問４）

「話す」「読む」「書く」「聞く」の４つの項目について、「よくできる」「まあまあできる」「あまりできない」「できない」の４件法で回答してもらった結果、「話す」「書く」の難しさがあったことがわかる。FGI 参加者で来日時に日本語がまったくできない状態の方は、来日する際に、まったく日本語が使えない人は少ないことをアンケートから知ったと話していた。また、別の FGI 参加者は、回答者の中に日本に留学生として来た人や専門性の高い仕事をしている人たちが比較的多いのではないかという意見があった。区内に住んでいる外国人について、日本語ができる層と苦労している層に分かれる可能性を推察することができる。

質問４　あなたは初めて日本に来た時、日本語はどれくらいのレベルでしたか。（A～D それぞれについて、1～4 に〇は１つだけ）	A 話す	B 読む	C 書く	D 聞く
1. よくできる	11	11	11	15
2. まあまあできる	7	8	7	6
3. あまりできない	22	19	19	20
4. できない	11	13	14	10
総計	51	51	51	51

(4) あなたは今、どのくらい日本語ができますか（質問５）

「話す」「読む」「書く」「聞く」の４件法の回答結果から、「話す」と「聞く」のスキルが高かった。来日後に、会話能力や聞く能力は、生活の中で高めることができて

いる認識がある。まったく日本語を話せない、聞くことができない回答はなかった。他方、「書くこと」については、来日当初と同様、現在においてもスキルの向上が４つのスキルのうち最も低い結果が示されている。「読む」、「書く」スキルが生活上求められない可能性が高い。基本的な読んだり、書いたりする学習が不足しているため、能力を高めることが日常においてとても難しい可能性もある。日本では、文字を通して情報交換する割合が高いため、日本語の文字情報にアクセスする難しさがあるといえる。

FGI の参加者は、漢字圏（中国、台湾）から来ている場合、漢字から意味を読み取ることができるため、非漢字圏の出身者（ロシア、フィリピン、ベトナム、ネパール）の方に比べて、漢字を読んだり、書いたりする上で有利であると意見があった。

質問 5　あなたは今、どのくらい日本語ができますか。（A～D それぞれについて、1～4 に〇は１つだけ）	A 話す	B 読む	C 書く	D 聞く
1. よくできる	22	20	18	28
2. まあまあできる	16	14	11	13
3. あまりできない	13	13	19	10
4. できない	0	4	3	0
総計	51	51	51	51
初来日からしばらくして、全体的にできるようになっており、特に「話す」と「聞く」はできるようになっている者が多い。				

(5) あなたは今後、日本語を学びたいと思いますか（質問 6）

回答は、「積極的に学びたい」(18 件)、「機会があれば学びたい」(18 件)が同数で最も多かった。ただし、「無料であれば学びたい」という回答もあり、日本語を学ぶために費用を払うことが難しい、もしくは、費用を払ってまで日本語を学ぶことはしない、という考えが伺える。「学ぶ必要がない」という回答もあり、すでに日常生活をする上で、日本語を学習する必要性を感じていない方々もいると思われる。

FGI の参加者のうち、来日して杉並区での居住年数が短い方たちは、子育てや家事と両立しながらでも日本語を学ぶ意欲があることが意見交換から理解できた。しかし、家事育児に忙しく、また必ずしも経済的に余裕があるとはいえない。子育ての合間に仕事をしたいと考えている方が、日本語を学び続けたいと考えていることもわかった。

質問 6　あなたは今後、日本語を学びたいと思いますか。	N	%
1. 積極的に学びたい	18	35%
2. 機会があれば学びたい	18	35%
3. 無料なら学びたい	8	16%
4. あまり学びたくない	2	4%
5. 学びたくない	0	0%
6. 学ぶ必要がない	5	10%
総計	51	
学びたいが大多数(86%)を占めている。		

(6) あなたは今後、日本語を学ぶとしたら、どのようなところで学びたいですか　(質問 7)

回答は「無料で学べる教室や学校」(30 件)や「費用が安い公的機関やボランティアの教室」(22 件)、「自宅や勤務先から近い教室」(21 件)と、無料で公的性が高いか、またはボランティアによって運営されている日本語クラスで学ぶことを期待している。また、学ぶ場所は地理的に利便性の高い自宅に近いことや子どもと一緒に学べる場を希望していることがわかった。

FGI 参加者のなかには、杉並区交流協会の日本語教室やその他の身近にあるボランティアによって運営されている日本語教室を積極的に活用している方々もいることがわかった。日本語クラスや教室に参加することで、地域に暮らしている他の外国人との出会いがあり、情報交換やつながりを作る場にもなっている。言葉を学ぶことと同時に地域での人間関係を広げていく上で貴重な場所である。

質問 7　あなたは今後、日本語を学ぶとしたら、どのようなところで学びたいですか。（○はいくつでも）	N	%
1. 費用が高くてもしっかりと学べる学校	5	6%
2. 費用が安い公的機関やボランティアの教室	22	26%
3. 無料で学べる教室や学校	30	36%
4. 自宅や勤務先から近い教室	21	25%
5. 子どもを預かるサービスのある教室や学校	6	7%
総計	84	
「無料で学べる教室や学校」(36%)が最も多く、「費用が安い公的機関やボランティアの教室」(26%)、「自宅や勤務先から近い教室」(25%)の順になる。		

6. 生活についての親の意識

(1) あなたはいまの生活に満足していますか（質問 8）

「やや満足している」「満足している」の回答を合わせると 34 件(66%）、「やや不満」「不満」への回答は 7 件（14%）であった。回答の傾向としては、杉並区での生活に満足していることが示されている。「どちらでもない」回答が 9 件あり、満足でも、不満足でもない認識を示している。アンケート回答者にはネパール出身者が多く含まれているが、区内にネパールの学校カリキュラムを導入する国際学校（エベレスト・インターナショナル・スクール）があるという環境は、杉並区が便利な地域であると感じることと関係していると思われる。

FGI では、満足している理由として、杉並区は東京都内でも緑が多くあり、公園、図書館などの区の施設が充実しているという意見が多く出された。特に、子育てをするにはとてもよい環境にあるとの意見が複数あった。区内に職場があったり、都心の職場にも近いというメリットを高く評価していると思われる。

質問 8　あなたはいまの生活に満足していますか。	N	%
1. 満足している	16	31%
2. やや満足している	18	35%
3. どちらともいえない	9	18%
4. やや不満がある	4	8%
5. 不満がある	3	6%
6. わからない	1	2%
総計	51	
満足している者(66%)が多い。		

(2) 生活の中で、困っていることや心配なことがありますか（質問 9）

22 の選択肢のうち、最も多かった回答は、「日本語の不自由さ」(27 件)であった。「病気になったときの対応・病院で外国語が通じない」が 19 件あり、日本語の不自由さから心配が高いといえる。以下、「子どもの教育のこと」(20件)も困りごとや心配していることである。「住まい探し」(14 件)、「税金のこと」(11 件)、「仕事探し」(11 件)、「年金のこと」(9 件)、「母語情報の少なさ」(8 件)、「災害と緊急事態」(8 件)、「外国語の表示の少なさ」(6 件)、「近所の付き合い」(6 件)、「自分または家族の健康」(5 件)、「出産・育児」(4 件)、「住居の手続き」(4 件)、「出産と育児」(4 件)、「仕事／職場の人間関係」(4 件)、「介護・福祉施設へ」(3 件)、「ごみの捨て方」(1 件)、「結婚／離婚」(1 件)、「ドメスティックバイオレンス」(1 件)の順位となった。

「日本語」があらゆる生活場面で高い壁となっている。子どもの教育や病気や災害などいのちに関わることにもつながるため、日本語ができないことは家族にとって大きな

問題である。日本語がわからない場合でも、相談できる相手や場所が確保できていることが重要になるといえる。続いて、住まい探し、仕事探し、税金、年金に関する回答が多く寄せられた。行政サービスや日本語で問い合わせをする必要がある場面で、どのように相談したらよいか迷う場合がある。また、出産と育児、介護や福祉施設へのアクセスなど、ライフステージに応じて利用することとなる福祉制度やサービスについて悩むことがある。

FGI では、どうしても日本語の限界があり情報が不足することが意見としてあった。「分からないことを相談しようとしても、日本語が十分でないため、相談するのをためらってしまう」という意見に代表される。例えば、小学校入学の準備や中学校受験など、身近なところで情報が得にくいため、「日本人のママが当たり前のようにやっていることが外国人のママ(パパ)にはわからない」という意見があった。一人の参加者は「学校で親切な日本人のママ友がたくさんいて、子どものことでは本当に助かった」と話していた。外国人夫婦で、妻がフルタイムで働いていると父親が子どもの学校の対応をしているケースもあり、FGI では、外国人の父親が日本人のママ友の輪の中に入ることは難しいのではないかという質問が出された。このことに対して参加者の女性は、今は日本人のパパも子どもの学校に積極的に関わっているケースもあり、必ず日本人のパパも数人いるので、パパ友に助けてもらってはどうかとのアドバイスがあった。

「行政の窓口で日本語が通じない」「区役所への自分の意見の伝え方」「在留資格手続きのこと」は選択されなかった。

FGI では、特に病院の利用や公的な制度などについてほとんどわからないので、相談したいけれどあきらめてしまうことがあるということが話題となった。すなわち、困りごとや心配ごとがあっても、行政の窓口や区役所は相談に行きにくい場所となっているのではないだろうか。FGI では、日本で暮らしている中国系の人たちが困った時に利用している中国語の「WeChat」というアプリの紹介があった。困りごとの内容や程度に応じて、日本での生活にまつわる情報を得る手段となっている。中国系以外の人たちも「Facebook」で同じようなＱ＆Ａを利用していることがわかった。このように SNS が相談しにくいことでも気軽に質問できる場になっている。情報の正確性や信頼性が確保されているかは別である。

質問９　生活の中で、困っていることや心配なことがありますか。（○はいくつでも）	N	%
1. 日本語の不自由さ	27	16%
2. 母語の情報の少なさ	8	5%
3. 外国語の表示の少なさ	6	4%
4. 病気になったときの対応・病院で外国語が通じない	19	12%
5. 行政の窓口で外国語が通じない	0	0%
6. 区役所への自分の意見の伝え方	0	0%
7. 在留資格手続きのこと	0	0%
8. 税金のこと	11	7%
9. 年金のこと	9	5%
10. 住まい探し	14	9%
11. 仕事探し	11	7%
12. ごみの出し方	1	1%
13. 介護・福祉サービスの利用	3	2%
14. 出産・育児のこと	4	2%
15. 子どもの教育のこと	20	12%
16. 自分または家族の健康	5	3%
17. 結婚・離婚	1	1%
18. DV（配偶者などからの暴力）	1	1%
19. 仕事・職場での人間関係	4	2%
20. 近所の付き合い	6	4%
21. 災害時・緊急時の対応	8	5%
その他	6	4%
総計	164	
「日本語の不自由さ」(16%)が最も多く、「子どもの教育のこと」(12%)病気になったときの対応・病院で外国語が通じない」(12%)の順になる。		

(3) 生活の中で、困っていることや心配なことがあったときはどこ／誰に相談しますか（質問 10）

複数回答を含み、「家族」(19 件)、「同じ国出身の友人・知人」(18 件)、「日本人の友人・知人」(12 件)、「行政の相談窓口(国・都・市・区など)」(9 件)、「会社の人、学校や寮の先生や職員」(7 件)、「杉並区交流協会の窓口」(6 件)、「相談する相手がいない」(6 件)、「近隣の日本人」(5 件)、「ボランティア団体」(5 件)、「大使館と領事館」(5 件)の順となった。

家族や同じ国出身者に相談することが一般的な方法であることがわかる。また、日本人の友人・知人に相談することで、解決策を見出すことにつながる。一番の問題は、話す相手がいないケースである。同国人にも日本人にも相談できない場合に、安心して相談できる場所が求められる。

質問 10　生活の中で、困っていることや心配なことがあったときはどこ／誰に相談しますか。（○はいくつでも）	N	%
1. 行政の相談窓口(国・都・市・区など)	9	10%
2. 杉並区交流協会の窓口	6	7%
3. 会社の人、学校や寮の先生や職員	7	8%
4. 近所に住む日本人	5	5%
5. 日本人の友人・知人	12	13%
6. 同じ国出身の友人・知人	18	20%
7. ボランティア団体	5	5%
8. 大使館・領事館	5	5%
9. 家族	19	21%
10. 相談する相手がいない	6	7%
総計	92	
「家族」(21%)、「同じ国出身の友人・知人」(20%)の順になる。		

(4) ふだんの生活で必要な情報はどこで手に入れますか。（困りごとがあるときなどを含む）（質問 11）

回答は「ホームページ」(17 件)が圧倒的に多く、続いて「知人・友人」(13 件)、「SNS」(12 件)、「杉並区役所の窓口」(5 件)、「杉並区交流協会の窓口」(1 件)、「杉並区が発行しているくらしの便利帳」(0 件)の順となっている。日常生活に必要な情報には、ウェブサイトやソーシャルネットワークが活用されている。身近な知り合いや友人から情報を得ることも多い。各種行政機関のウェブサイトがどのくらい活用されているか質問していないため活用状況は分からないが、暮らしの便利帳など紙媒体のものは、区内の基本情報や利便性の高い情報が掲載されていても利用されない傾向がある。本アンケートでは国際交流団体の利用の回答も少なかった。

FGI から分かったことは、一般的に行政が提供している情報は、当事者にはあまり利用されていないことがわかった。その理由として必要な情報を日本語で探すことや検索方法がわからない場合が多い。また、FGI の中で出た意見として「就学、病院利用、その他区民として知っておくべき事柄について講座を開催してもらえるととても助かる」という意見があった。そのような講座に参加することで「日常情報についての質問や意見交換がしやすくなり、情報を正しく理解できるようになる」との意見が出された。

問 11　ふだんの生活で必要な情報はどこで手に入れますか。（困りごとがあるときなどを含む）	N	%
1. 知人・友人	13	27%
2. SNS	12	25%
3. ホームページ	17	35%
4. 杉並区が発行しているくらしの便利帳	0	0%
5. 杉並区役所の窓口	5	10%
6. 杉並区交流協会の窓口	1	2%
総計	48	
「ホームページ」(35%)が最も多く、「知人・友人」(27%)、「SNS」(25%)の順になる。		

7. これからの杉並区での居住についての意識

(1) これからどれくらいの期間、杉並区に住む予定ですか（質問 12）

回答は「10 年以上」(17 件)が最も多く、「わからない」(14 件)が次に多い回答であった。中長期的に杉並区で暮らすことを考えている方々がいる一方で、将来は引っ越しをする可能性のある方々もいることがわかった。在留目的によって居住期間についてのイメージは異なるといえる。

FGI では、どのくらい杉並区に住み続けるか答えることは難しいという意見が多数であった。杉並区外に引っ越しをする可能性として、世帯の働き手の就労と子どもの進学先が主な要因となることがわかった。また、有期契約やフリーランスで働いている場合、収入が減少したり、次の勤務地が杉並区から遠くなる場合は、引っ越さざるを得ないという意見があった。収入が減ることになった場合、家賃の安い近県に引っ越すことを考えている。また、子どもの教育を何より優先に考えて、子どもの学校に通いやすい場所に引っ越すという意見があった。杉並区内で長年生活していて、持ち家があったり、子どもがすでに中学生になっている方の場合は、これからも長く暮らしたいという意見であった。

問 12　これからどれくらいの期間、杉並区に住む予定ですか。	N	%
1. 1 年未満	3	6%
2. 1 年～4 年	7	14%
3. 5 年～9 年	9	18%
4. 10 年以上	17	33%
5. その他（例：帰国の予定がある）	1	2%
6. わからない	14	27%
総計	51	
「10 年以上」(33%)が最も多く、「わからない」(27%)、「5 年～9 年」(18%)の順になる。		

8. 子どもの教育についての意識

(1) あなたには、0 歳～5 歳のお子さんがいますか（質問 13）

0 歳～5 歳の子どもの有無と保育園の利用などについて尋ねた。「いる(日本で保育所か幼稚園に通っている)」(16 件）、「いる(日本にいるが、保育所や幼稚園には通っていない)」(4 件)、「いる(日本にいない)」(1 件)の順に回答を得た。0 歳から 5 歳の年齢のいる家庭では、保育園に通わせている割合が高い。外国人世帯にとって保育は必要なサービスとなっている。

FGI の意見交換でも、保育園に子どもを通わせることは普通のことであり、共働き世帯にとっては欠かせないものとなっていた。外国につながる幼児を受け入れる保育園の課題については特に語られなかった。就学前に、同年齢の児童と交流したり、親が日本人の保護者との関わりを持つことは、外国につながる親子の社会化(日本の社会に適応すること)に重要であるといえる。

質問 13　あなたには、0 歳～5 歳のお子さんがいますか。	N	%
1. いる（日本で保育所か幼稚園に通っている）	16	31%
2. いる（日本にいるが、保育所や幼稚園には通っていない）	4	8%
3. いる（日本にいない）	1	2%
4. 0 歳～5 歳の子どもはいない	30	59%
総計	51	
いない(59%)、いる(41%)になる。		

(2) あなたには、6 歳～14 歳のお子さんがいますか（質問 14）

回答は「いる(日本で公立の小学校または中学校に通っている)」(15 件)、「いる（日

本で外国人学校に通っている)」(7 件)、「いる(日本で私立の小学校または中学校に通っている)」(6 件)、「いる(日本にいるが、小学校や中学校に通っていない)」(1 件)、「いる(日本にいない)」(1 件)の順であった。外国人学校や私立学校よりも、公立の小中学校に通っている割合が多いことがわかった。公立学校の生徒の国際化や多様な背景をもつ生徒の増加がうかがわれる。杉並区には、ネパールの学校カリキュラムを導入するエベレスト・インターナショナル・スクール（外国人学校）があり、杉並区外に暮らすネパールの子どもたちも通学している。母国の教育を受けさせたい家族の意向が学校の運営を支えている。授業料は決して安くはないため、経済的な理由から区立の小学校に転入する子どもたちもいる。他方、海外の学校で教育を受けさせている回答が 1 件あった。日本に暮らす家族であっても、必ずしも子どもの教育を日本で受けさせているとは限らない。日本の学校に通わせることは日本的な価値観の中で子どもが成長することでもあり、どこで学ばせるかは、家族にとってとても重要な課題であるといえる。

質問 14　あなたには、6 歳～14 歳のお子さんがいますか。	N	%
1. いる（日本で公立の小学校または中学校に通っている）	15	29%
2. いる（日本で私立の小学校または中学校に通っている）	6	12%
3. いる（日本で外国人学校に通っている）	7	14%
4. いる（日本にいるが、小学校や中学校に通っていない）	1	2%
5. いる（日本にいない）	1	2%
6. 6 歳～14 歳の子どもはいない	21	41%
総計	51	
いる(59%)、いない(41%)になる。		

FGI の参加者の一人は、子どもの反抗期には、上手く進学について話し合うことができなかったと話していた。日本人の親が小学校や中学校受験を子どもにさせることに積極的な地域性があると、外国人の親としても周りに影響される側面もある。近年、外国人の中には、母国の教育ではなく、子どもの将来を考えて日本の学校教育を受けさせたいと考えている人々も増えている。日本に定住するか、あるいは将来、母国に戻るかを見据え、どのような教育が望ましいか、親子でしっかり話しあうことが求められる。中長期的に区内に暮らす外国につながる家庭に対し、子どもの教育相談や学校選択のための情報提供など、サポートの充実が課題である。

(3) あなたのお子さんは、日本語がどのくらいできますか（質問 15）

質問 14 で「日本の小中学校に通う子どもがいる」と回答した方に子どもの日本語能力をどう認識するかについて質問した。複数回答のうち、「日本語での授業を十分理解できる」(8 件)、「ほとんどできない」(4 件)、「日本語での授業を受けるのは難しいが、日常生活ではあまり困らない」(3 件)、「ふだんの生活で、時々困ることがある」(3 件)、「どのくらいできるかわからない」(3 件)という結果であった。子どもの日本

語能力は、来日時期や滞在期間によって異なる。日本の小中学校に通っている 21 人のうち、8 人は授業を理解している。他方、7 人については、日本語能力が十分でない状況がうかがえる。学校という環境の中で、日本語能力が十分でない状況にあり、学習面で苦労していることが推察できる。

FGI では、日本で生まれたか、幼児期に来日した子どもであれば、日本語の問題はかなり小さいという意見があった。しかし、小学校以降の時期に日本の学校に転入すると日本語の問題が出てくることが共有された。実際に参加者の一人からは、子どもが小学校転入学時に不適応を起こしかけた経験が共有された。親の心理的なサポートもあり、徐々に日本の学校環境へ適応していったという。「学校で受けた日本語指導の時間では、先生と個別に話しながら勉強できた」と、子どもにとってとても貴重な時間であったことを話してくれた。日本語学習時間の上限が決められているので、本当はもっと日本語指導を受けられることを要望している。

質問 15　あなたのお子さんは、日本語がどのくらいできますか。	N	%
1. 日本語での授業を十分理解できる	8	38%
2. 日本語での授業を受けるのは難しいが、日常生活ではあまり困らない	3	14%
3. ふだんの生活で、時々困ることがある	3	14%
4. ほとんどできない	4	19%
5. どのくらいできるかわからない	3	14%
総計	21	
日本語ができると思う者(52%)が多い。		

(4) あなたはお子さんが中学を卒業した後、どんな進路に進ませたいですか（質問 16）

質問 14 で「日本の学校に通う 6 歳から 14 歳の子どもがいる」と回答した方に子どもの中学校卒業後の進路の希望について質問した。回答の結果は「日本の高校に進学させたい」(13 件)、「日本のインターナショナルスクールに通わせたい」(10 件)、「母国の学校に進学させたい」(3 件)、「日本、母国以外の学校に進学させたい」(1 件)、「進学せず、働いてほしい」(1 件)であった。中学校卒業後の高校進学については、日本の高校もしくは日本にあるインターナショナルスクールに通わせたいという親が多いことがわかった。母国の学校に通わせることも選択肢と考えている親もいる。いくつかの選択肢があることは、子どもの高校進学を保障する上で重要であるといえる。

FGI の参加者の中に、子どもが中学を卒業したら働いてもらいたいと考える親はいなかった。将来、日本や母国以外の学校に通わせたいと考える参加者は「母国や日本ではなく欧米で教育を受けさせることができれば、子どもの視野が広がり、国際人となって

もらえる」という考えを語っていた。そのほか「母国では受験競争があるため、母国の教育環境に子どもを戻したくない」「日本でのびのびと教育を受けさせたい」という参加者もいた。その方々は、日本の教育環境を評価しており、子どもたちの成長や将来にプラスになると考えている。

問 16　問 14 で日本で学校に通う 6 歳～14 歳のお子さんがいると答えた人にお聞きします。あなたはお子さんが中学を卒業した後、どんな進路に進ませたいですか。	N	%
1. 日本の高校へ通学させたい	13	46%
2. 日本のインターナショナルスクールに通わせたい	10	36%
3. 母国の学校に進学させたい	3	11%
4. 日本、母国以外の学校へ進学させたい	1	4%
5. 進学せず、働いてほしい	1	4%
総計	28	
「日本の高校へ通学させたい」(46%)が最も多く、「日本のインターナショナルスクールに通わせたい」(36%)の順になる。		

(5) あなたのお子さんが学校に通っていないのはなぜですか（質問 17）

質問 14 で「日本にいるが学校に通っていない 6～14 歳の子どもがいる」と回答した方に子どもの不登校の理由について聞いた。7 つの選択肢のうち「学校に入学する手続きが難しいから」が 1 件あり、「子どもが学校に行きたがらないから」、「子どもが日本語がわからないから」、「お金がないから」、「いじめや差別が心配だから」、「日本の教育は自分の子どもに合わないと思うから」、「日本に長く住むつもりはないから」は選択されなかった。日本人の不登校の子どもたちが増えている状況の中で、外国につながる子どもたちの不登校も増える可能性が危惧される。教育制度のはざまにある不登校の外国につながる子どもたちの存在については把握する必要がある。

問 17　問 14 で日本にいるが学校に通っていない 6 歳～14 歳のお子さんがいると答えた人にお聞きします。あなたのお子さんが学校に通っていないのはなぜですか。（〇はいくつでも）	N	%
1. 子どもが学校に行きたがらないから	0	0%
2. 子どもが日本語がわからないから	0	0%
3. お金がないから	0	0%
4. 学校に入る手続きが難しいから	1	100%
5. いじめや差別が心配だから	0	0%
6. 日本の教育は自分の子どもに合わないと思うから	0	0%
7. 日本に長く住むつもりはないから	0	0%
総計	1	

（6）あなたは子育てや子どもの教育について、どんな助けがあったらよいと思いますか（質問 18）

子育てや教育に関する支援についての回答結果は、「子育てや子どもの教育について相談できる場所」（14 件）、「親子で地域の友達と交流できる場所」（7 件）、「健康診断や医療相談のサポート」（5 件）、「幼稚園、保育所、学校での子どもの様子を知るためのサポート」（4件）、「子どもの居場所（放課後や休日に子どもが安心して過ごせる場所など）」（4 件）、「子どもへの母語による教科学習サポート」（2 件）、「子どもへの日本語学習サポート」（3件）、「子どもへの日本語による教科学習サポート（宿題や復習など）」（3 件）、「区役所での手続きのサポート」（2 件）、「学校や行政からのお知らせや書類を理解するためのサポート」（1 件）、「特に支援は要らない」（3 件）であった。

子育てや子どもの教育に関わる相談ニーズがある。外国につながる家族の状況を踏まえた相談を受ける場所、もしくは対応ができる専門家/ボランティアなどの人材が求められる。欧米で進む同じ民族性の相談員の育成は、言語や文化的側面に配慮した対応ができることから大変意義があるといえる。

FGI においても、子育てや教育に関する情報と相談機会が求められていることがわかった。行政が対応する相談だけでなく、NPO などによる外国人相談の場が拡大するとよいといえる。行政と NPO の外国人相談支援の多機関連携も検討できるとよい。

質問 18　0～14 歳のお子さんがいる人にお聞きします。あなたは子育てや子どもの教育について、どんな助けがあったらよいと思いますか。（○はいくつでも）	N	%
1. 子育てや子どもの教育について相談できる場所	14	29%
2. 親子で地域の友達と交流できる場所	7	15%
3. 区役所での手続きのサポート(相談・通訳・同行など)	2	4%
4. 幼稚園、保育所、学校での子どもの様子を知るためのサポート	4	8%
5. 健康診断や医療相談のサポート	5	10%
6. 子どもの居場所(放課後や休日に子どもが安心して過ごせる場所など)	4	8%
7. 子どもへの母語による教科学習サポート	2	4%
8. 子どもへの日本語学習サポート	3	6%
9. 子どもへの日本語による教科学習サポート（宿題や復習など）	3	6%
10. 学校や行政からのお知らせや書類を理解するためのサポート	1	2%
11. 特に支援は要らない	3	6%
総計	48	
「子育てや子どもの教育について相談できる場所」(29%)が最も多い。		

9. 自由回答

質問 26 では自由記述項目を設けて、質問や意見を書いていただいた。その結果、意味が読み取れる回答 15 件の回答を確認した。その主な意見や質問として「通訳のボランティアとして学校のお手伝いをしたい」、「自分のお店をもちたい」、「自分も外国人であるが、必ずしもすべての外国人が善良であるとは限らないので、心配している。」、「長く日本で生活しているが、ビザの更新の頻度を考えてほしい」、「日本の政府に日本語を学ぶ機会を提供してほしい」、「日本の公立小学校で、英語を教えたい。他の言語も子どもたちが学べたらもっとよい。」、「杉並区で生活保護を受けることができて、助かった経験がある。」、「通訳者を付けていただき、制度を理解できた。」、「スペイン語で支援してくれるところを探すのは簡単ではない」、「差別を受けた場合に対応してもらえる場所を教えてほしい」、「子どもの高校進学時に家庭で大変苦労したが、結果的に素晴らしい高校に入学できた」、「杉並区の外国人児童への助成金や貸与奨学金はありますか」、「もっと外国人にやさしい街になってほしい」、「子どもの未来を日本で探したい」などが寄せられた。

第3章　第1部のまとめと課題の整理

1. アンケート調査のまとめ

アンケートの回答者は、杉並区で居住している外国人もしくは外国につながる区民である。家庭では、親子は複数の言葉を使いながらコミュニケーションをしている。家庭外においては、日本語が必要となっている。来日して生活が長くなるにつれ、日本語を話すこと、聞くことについては進歩がみられるが、読む、また、書く能力を高めることは難しい状況が伺えた。そのために意欲を持って日本語を学んでいる方々がいる一方で、日本語の勉強をあきらめている方々もいる。すなわち、日本語を勉強する必要がないというよりも、授業料を払ってまで勉強をする余裕がない、日本語を学べる場所が家の近くにない、もしくは仕事で忙しく学ぶ時間を優先できない状態にある人が多いといえる。

特に日本の学校に通っている子どもを持つ親の場合、親の日本語能力は、子どもの学校での学習や学校生活をサポートする上でとても重要である。親の日本語能力が不十分な場合、学校からのお便りなどを理解することが難しく、学校において子どもたちが不利な状況におかれてしまう可能性が否めない。家庭との連絡が困難なケースに対して学校がどのような対応を取っているか確認する必要がある。また、子どもの日本語能力にも個人差があり、日本語指導において学校が直面している課題を個別的に把握する必要があるといえる。そうした課題には学校の対応の限界もあると思われる。家庭の経済状況や教育方針が多様化している様子から、子どもたちの学びの場所も、近隣の公立学校、私立学校、インターナショナルスクールなど広がりがある。小学校卒業後の進路についても、親たちは多様な考えを持っている。すなわち、中学、高校への進学に際して、個々の生徒のニーズに合ったサポートが必要となる。

外国人にとって日本の制度(納税義務や社会保障制度など)を理解することはとても難しいことがアンケートからわかった。日本語ができなければ、制度があることさえ知らない状況におかれてしまう。外国人であっても住民として果たさなければならない義務があり、同時に外国人であっても利用できる制度はあるが、誰がそれらの情報を伝えるのか。スムーズな情報提供システムになっているかの検証が求められる。

外国人は困ったときに、家族内で相談するか、もしくは同じ国出身の友人に相談することが多いことがわかった。回答者の中に学校の入学手続きがわからないため就学させていない回答があった。この回答者は、日本語ができないうえ、相談できる人が近くにいないと思われる。このような親への対応は子どもの教育を受ける権利を保障する点からも重要である。

自分では何もできない状況に陥らないよう、困ったときに相談できる仕組みをもっと工夫する必要があるといえる。外国人および外国につながる家庭や子どもたちが孤立しないよう、見守れる近隣のつながりを強化することも課題である。

2. フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）のまとめ

FGI では、参加者は様々な国籍(中国、台湾、ロシア、カナダ、フィリピン)の方々と

杉並区での生活経験や子育ての課題について意見交換をおこなった。主な話題は、言語の壁、教育システムの違い、情報へのアクセス、コミュニケーションの難しさなどであった。参加者たちは、日本語学習の重要性や、子どもの教育に関する決定の難しさ、地域コミュニティとの関わり方などについて議論した。また、杉並区での生活の満足度や、今後の滞在予定についても話し合った。

(1) フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）の内容

1) チャイルド・ファンド・ジャパンの紹介と参加者の自己紹介

チャイルド・ファンド・ジャパンの職員による団体についての説明があった。その後、参加者が順番に自己紹介をおこない、出身国、日本滞在期間、家族構成などを共有した。

2) 言語の壁と日本語学習について

参加者は日本語学習の経験や課題について話し合った。多くの人が日常会話では日本語を使用しているが、読み書きや専門的な内容の理解に苦労していることが明らかになった。子どもの日本語習得についても議論され、学校での支援（日本語補習）の重要性が指摘された。

3) 子どもの教育と進路選択

参加者たちは子どもの教育について、日本の学校システムや進学に関する情報不足、言語の問題などを共有した。インターナショナルスクールや母国の教育システムとの比較もおこなわれ、子どもの将来を考えた教育を選択することの難しさが議論された。

4) 杉並区での生活と今後の滞在予定

参加者は杉並区での生活の満足度や、今後の滞在予定について話し合った。多くの人が子育て環境や自然の豊かさを評価したが、仕事や子どもの教育の関係で将来は転居も考えている。

5) 情報アクセスと行政サービスの課題

参加者は行政からの情報や各種手続きの難しさについて意見を交換した。言語の壁だけでなく、制度の理解や文化の違いによるコミュニケーションの難しさも指摘された。外国人向けの情報提供や支援サービスについても議論した。

3. アンケートとフォーカス・グループ・インタビューから見える課題

上記のことから外国ルーツのこと保護者の課題は、以下のように整理できる。

(1) 外国ルーツの保護者の日本語学習機会の不足や条件がうまく合っていない。

(2) 外国ルーツの子どもたちの学校での日本語学習は十分ではない。

(3) 外国ルーツの子の保護者が参加できる、子どもの教育や進路選択に関する情報の機会が不足している。

(4) 外国人居住者向けの多言語生活情報が利用しにくい。

(5) 公的な場での相談や地域とつながれない。

第 2 部　個別インタビュー調査編

第 1 章　調査の目的と概要

1. 個別インタビュー調査の目的

杉並区内で生活する外国につながる人々が増加傾向にあり、地域における多文化共生の点から、外国ルーツの子どもの保護者への個別インタビューおよび支援団体や機関の関係者へのインタビューを通じて、外国にルーツのある子どもたちと家族の課題を明らかにする。

2. 外国ルーツの子どもの保護者個別インタビュー調査実施概要

(1) 調査課題について

杉並区で暮らす外国ルーツの子どもの保護者の「言葉」「子どもの教育」「心配・困りごと」「居住」などについての意識から、生活状況と課題を把握にすることを目的とする。

(2) インタビューガイドの作成と実施

来日時期、来日目的、家族構成、子どもたちの教育(入学後の状況や困ったことなど)、日本語の学習、生活の困りごと、地域で困ったことなどを中心に、家族の生活や子どもの教育についてインタビューガイドを用いた。

(3) 実施体制

調査研究チームは、2 名の直接協力依頼者のほか、杉並区交流協会を通じて外国につながる区民 6 名にインタビューへの協力を依頼した。インタビュー対象者と個別インタビュー日時および場所を調整し、準備をおこなった。

(4) 調査実施期間と実施方法

2024 年 4 月から 6 月にかけて、プライバシーが保護される場所において個別インタビューを実施した。個別インタビューの実施に際して、調査の趣旨を説明し、同意を得て、1 件あたり 60 分から 90 分程度で実施した。個別インタビューは、日本語もしくは英語で実施したが、必要に応じて母語通訳者の協力を得た。

3. 支援団体・機関関係者個別インタビュー調査実施概要

(1) 調査課題について

外国ルーツの子どもおよび家族に関わりのある団体・機関の関係者へのインタビューを通して、支援者や関わりをもつ側から外国ルーツの子どもと家族の置かれている状況や課題を探索することを目的とした。

(2) 個別インタビュー協力者の選定とインタビューガイドの作成

外国ルーツの子どもおよび家族に関わりのある支援団体・機関の関係者 13 人を選定し、インタビューガイドを作成した。

（3）調査実施期間と実施方法

2024 年 3 月から 11 月にかけて、プライバシーが保護される場所において個別インタビューを実施した。個別インタビューの実施に際して、調査の趣旨を説明し、同意を得て、1 件あたり 60 分程度で実施した。個別インタビューは、日本語（1 件は英語）でおこなわれた。

第 2 章　保護者個別インタビューの実施と結果

1. 保護者個別インタビュー対象者

インタビュー対象者 8 人の出身国は、エルサルバドル 1 人、日本 1 人、中国 2 人、フィリピン 1 人、ネパール 2 人、韓国 1 人であった。対象者のうち、2 人が男性、6 人が女性であった。

(1) 保護者個別インタビュー協力者と家族のプロフィール

No.	仮名	年齢	性別	国籍	雇用形態	居住期間 （インタビュー時点）
1	C さん	40 代	女性	エルサルバドル	パートタイム （飲食）	1 年 3 カ月 （2023 年 4 月～）
2	N さん	50 代	女性	日本	パートタイム （サービス）	22 年 （2022 年～）
3	B さん	30 代	女性	中国	主婦	1 年 4 カ月 （2023 年 2 月～）
4	A さん	40 代	男性	フィリピン	主夫	3 カ月 （2024 年 3 月～）
5	T さん	30 代	女性	中国	主婦	1 年 3 カ月 （2023 年 3 月～）
6	M さん	30 代	男性	ネパール	フルタイム （飲食）	8 年 （2016 年 2 月～）
7	K さん	40 代	女性	韓国	パートタイム （心理職）	1 年 8 カ月 （2022 年 11 月～）
8	G さん	40 代	男性	ネパール	フルタイム （金融）	9 年 （2015 年～）

1）来日目的

インタビュー対象者 8 名のうち、7 名については、家族の主たる稼得者が日本で仕事をすることに伴い家族帯同にて来日している。1 名は日本国籍で、日本国内で外国籍の方と結婚したことにより外国につながりができた方である。

2）家族の特徴

インタビュー対象者 8 名のうち、2 名は国際結婚であった。他 6 名は同国人同士の結婚であった。すべての調査対象者には、就学前から高校までの未成年の子どもがいる。

3）居住年数と居住形態

インタビュー対象者 8 名のうち、杉並区に居住して 20 年以上が 1 名、10 年以下が 2 名、2 年未満は 4 名、1 年未満は 1 名となった。全体として、杉並区内での生活経験の浅い方々が多かった。すべての対象者は、賃貸住宅に居住している。

4）居住目的

インタビュー対象者のうち、1 名は日本国内での定住を前提に居住しているが、7 名については、就労もしくは家族滞在により在留している。数年単位で在留資格の更新が必要となるため、もしくは、雇用先から滞在期間が決められているため、必ずしも長期的に居住することを前提としていない。

5）家族形態

インタビュー対象者のすべての家族は、夫婦と子どもから構成されている核家族である。対象者の一人は、老親の介護のため、妻と子どもを母国に帰国させていることから現在単身生活者であった。老親の健康の回復後に妻と子どもたちは杉並区に戻って来る予定である。

6）家庭内での使用言語

国際結婚の 2 名の対象者は、家庭内で夫婦双方の母語および英語を使用している。同国人同士の夫婦の場合、家庭内での主言語は母語であるが、必要に応じて英語、日本語を併用している。子どもがインターナショナルスクール、民族学校に通学している場合は、家庭内で英語も使用している。

2. 個別インタビューの要約

(1) C さん（女性 40 代：エルサルバドル出身）

インタビューのポイント：
- ► 来日時期と家族構成
- ► 仕事の経験
- ► 新しい環境への適応の工夫
- ► 日本人とのつながり
- ► 家庭での言葉
- ► 子どもの教育と学校生活

C さん家族が利用した地域資源：
夫の大学の職員、職場の同僚（外国人）、教育委員会、区役所、小学校、中学校（先生、友達、日本語の先生）、高校（先生、友達）、高校進学ガイダンス、杉並区交流協会、教会、歯科クリニック、補習教室（居場所＋仲間）、スピーチコンテスト。

インタビューノート：
C さん家族は、家族みんなで話し合って 2 年間日本で生活することに同意して来日している。夫の研修先の大学職員のサポートも大きな助けであった。C さんは、とても積極的に地域に出て、新しい経験を積んだ。子どもたちも両親に励まされながら、地元の区立の学校に入学して日本語の勉強を頑張ってきた。新しい環境のなかで子どもたちは様々な困難を経験しながらも、学校の先生や友達とのよい関係を築くことができた。

中学校の先生のサポートや家族の励ましもあり、娘さんは都立高校入試にチャレンジしたり、また、日本語スピーチ大会に参加して自信をつけていった。目標を立てて頑張ることは子どもの成長につながるといえる。エルサルバドルの料理の紹介などを通して自分たちの国や文化の紹介する経験は、母親と子たちの自尊心を高めることにつながった。

(2) N さん（女性 40 代：日本出身）

インタビューのポイント：
- ►家族
- ►フィリピンで育った子どもたち
- ►コロナ前後から娘に変化
- ►娘たちの新たなチャレンジ
- ►次女の中学校とのつながり
- ►地元の補習教室とのつながり
- ►フリースクールでの高校受験勉強

N さん家族が利用した地域資源：
親の見守り、教育委員会、学校の先生、生徒、スクール・ソーシャルワーカー、精神科クリニック、杉並区交流協会、補習教室＋居場所、補習教室の仲間、フリースクール、同じ状況のフィリピンや外国出身の友達

インタビューノート：

夫婦にとって二人の子どもとフィリピンで老後を過ごす計画が崩れてしまったが、子どもたちと東京で新たな生活をこれから築こうとしている。娘たちはそれぞれの課題に取り組んでいる。母親は日本人であるため、子どもたちが日本で自立していくために大切な存在である。また、父親は娘たちとフィリピン語でコミュニケーションができるため、フィリピンとのつながりを維持するためには大切な存在である。自分のアイデンティティである父と母の二つの国の文化を大切に成長してほしい。

長女は日本語を学び、安定した仕事につくことができれば、経済的にも自立ができる。次女は、高校入学を目指しているため、母親のサポートが欠かせない。娘たちが将来自立することができれば、もう一度、フィリピンで夫婦の老後の生活を計画できるのではないだろうか。

次女のような登校したくてもできない子どもたちにとって、学校（先生、生徒、スクール・ソーシャルワーカー、スクール・カウンセラー）とのつながりは課題を乗り越えるために必要である。また、NPO が運営する補習教室やフリースクールには学校が果たせない役割がある。

子どもの課題を親や家族が抱え込まないように、同じ状況にある人たち同士がつながることのできる機会を作れるとよいのではないだろうか。

(3) B さん（女性 30 代：中国出身）

インタビューのポイント：

▶来日と家族構成
▶不安な生活の始まり
▶来日を決めたきっかけ
▶学校が楽しい娘
▶もっと日本語を勉強したい
▶日本でこれからも暮らしたい
▶中国語で情報収集（インターネット、通訳の活用）
▶近所のクリニックの利用経験
▶日本の幼稚園、小学校の親の経験

B さん一家の利用した地域資源：

幼稚園、小学校、耳鼻科クリニック、杉並区交流協会、インターネット（情報取得、翻訳など）、スマホの翻訳アプリ、不動産会社（中国人経営）、公園、区役所の相談、健康保険、幼稚園のママ友

インタビューノート：

杉並区で得た様々な経験は、B さん家族の子どもの教育や長期的な暮らしの大きな助けになっている。B さんは中国の教育と比べて、将来の選択肢が多い日本の教育を評価している。長期的に日本で安定した仕事ができれば、子どもの日本での教育の機会や将来も開かれてくるだろう。このような子どもたちと日本の子どもたちの交流が広がることは、相互の友好関係を築く礎となるであろう。

家族が中国に帰国しなければならない状況が生じた際には、子どもは中国の学校に再統合されることになり、それに伴う困難も想定しておく必要があるように思われる。子どもが中国語を維持することは基本的に必要となる。在留期間が不確定の子どもを受け入れる学校や地域社会は、多様な家族をどのように受け止めて関わったらよいか準備する必要があるのでないだろうか。

(4) A さん（男性 40 代：フィリピン出身）

インタビューのポイント：
▶来日時期と家族構成
▶移動先での生活
▶来日と生活の考え方
▶主夫としての生活経験から
▶生活での心配ごと
▶情報の集め方
▶外国人主夫は孤立しやすい

A さんが利用した地域資源：
区役所、杉並区交流協会、中華学校、保育園、クリニック、台湾の両親、フィリピンの家族・友人、Google 翻訳、インターネット、SNS（Facebook）

インタビューノート：
　Aさん夫婦は、妻が生計を支え、夫が家事および子どもの世話を担当している。妻は台湾国内でキャリアアップを選択せず、海外で仕事をすることを選択している。Aさんはそのような妻の働き方を尊重している。Aさん自身も仕事をしたいとは考えているが、今は子育てを優先している。将来、日本で仕事をすることを考えて、日本語学習を続けている。
　外国人男性が主夫や家事をする場合、確かに日本では孤立しやすく、社会参加が難しいといえる。頼れる親戚もいないため、下の娘の保育園との関わりや子育てを通じ、近隣で参加できる趣味活動に繋がれることを願いたい。

(5) T さん（女性 40 代：中国出身）

インタビューのポイント：
▶来日と家族構成
▶母親の学校への同行と見守り
▶日本と中国の学校文化の違い、プリント、プリント・・・
▶日本の学校のイメージがない親としての戸惑い
▶少しずつ学校に慣れてきた息子
▶個別の日本語指導サポート
▶夫の仕事と子どもの教育の両立
▶ネットワークを広げたい
▶中国と日本の懸け橋になることをやってみたい

T さん一家の利用した地域資源：
区役所、杉並区交流協会、子ども日本語教室、日本語個別指導、学校の先生、仲良しの友達、区の体育館や図書館、小児科クリニック

インタビューノート:

Tさんは中国、北京にある外国語学院で4年間日本語を勉強し、日系の会社で仕事をした経験がある。このことは、日本の生活に家族が適応する上で、大変役立っている。

息子が日本の公立小学校に 3 年生で転入する際、適応できるか心配したようであるが、母親の学校の授業への同席や先生との関わり、息子の友達との交流が適応への助けとなった。

日本語がわかっても、日本の習慣がわからないと意味を理解できない場合がある。日本の文字文化は、日本での生活経験がない彼らにとって、生活を難しくする要因でもある。

内向的なうえ、言葉がわからない子どもは自分から話しかけることは難しいため、先生にも気づかれにくい存在となる。学校では、教育委員会から派遣された日本語指導員に一対一で指導してもらった。言葉の習得だけでなく、心理的にもよい効果があるのではないだろうか。学校と家庭の間のつながりが強化されることは子どもの生活の安定に必要なことである。

(6) M さん（男性 30 代：ネパール出身）

インタビューのポイント:

▶来日と家族
▶娘の学校
▶簡単でないビザの変更
▶ネパールではレストランの経営者
▶コロナ乗り越え、仕事中心の生活
▶将来は自分の店
▶あればよいと思う知識

M さん一家の利用した地域資源：

エベレスト・インターナショナル・スクールの先生、ネパール人の友達、ネパールレストラン、ネパールレストランの日本人経営者、ネパール人同士の相互扶助（コロナ禍）、地域の夏祭り

インタビューノート:

M さん家族は 8 年間日本で暮らしており、生活基盤は東京にある。料理人として、これからも東京で働き、子どもの教育も高校まで日本で予定している。

エベレスト・インターナショナル・スクールでは、週に 1 回、英語と日本語の授業があるが、娘さんは買い物などで困らないくらいの日本語は理解できるようである。M さんは放課後を活用して子どもたちに日本語を勉強させたいようである。補習教室の利用は有効である。エベレスト・インターナショナル・スクールも地域に根差す学校として、より一層、地域とのつながりを作れないだろうか。

この家族と同じ環境にいる家族も多いと思われるが、それぞれの家族は仕事を中心に生活をしている状況にあり、民族的なつながりを強めたり、支え合うための組織を作るだけの余裕はない。このような状況の中で、エベレスト・インターナショナル・スクールには地域を繋ぐ役割を期待したい。

(7) K さん（女性 40 代：韓国出身）

インタビューのポイント：
▶来日と家族
▶インターナショナルスクールを選択
▶インターナショナルスクールの経験
▶教会の精神障害のセルフヘルプ・グループへの関心
▶日本語の学び
▶自宅出産の計画
▶外国人にやさしくない病院
▶日本でキャリアも積みたい
▶将来、韓国に戻ることの心配

K さん一家の利用した地域資源：
夫のサポート、社宅の韓国人コミュニティ、インターナショナルスクール、ファミリーピクニック、学校の保護者 LINE グループ、杉並区交流協会、教会の精神障害者のセルフヘルプ・グループ、助産スタッフ、韓国の母親

インタビューノート：
K さん家族は、夫の会社の都合で東京へ転勤することになった。滞在期間が会社によって 4 年間と決められていることから、子どもの教育は将来を考えてインターナショナルスクールを選択している。インターナショナルスクールの日本人の母親たちともっと親しくなりたいと思っているが、アプローチすることの難しさを経験した。K さんは、カウンセラーの専門性を活かして地域貢献したいと考えている。K さん家族だけではないが、母国の文化とは異なる環境で育つ子ども（third culture kids）の課題に視点をあてることも大切である。

(8) G さん（男性 40 代：ネパール出身）

インタビューのポイント：
▶来日と家族
▶海外転勤の生活
▶東京での仕事と雇用条件
▶ネパールと日本の会社文化の違い
▶日本の学校教育への戸惑い
▶ネパール人学校へ転校
▶ネパール人の生活の目的
▶都営住宅の当選
▶中間搾取の被害に遭うネパールの若者
▶退職後の計画

G さん一家の利用した地域資源：
区役所、保育園、都営住宅、公立小学校、エベレスト・インターナショナル・スクール、（日本での）ダサインのお祭り※、杉並区交流協会
※ダサインのお祭り：ダサインは、ネパールで最も重要なヒンドゥー教のお祭りで、善の勝利を祝うお祭り。毎年 9 月半ばから 10 月にかけて 15 日間おこなわれ、家族や親族が集まって祝う。

インタビューノート：
　Gさんは、ネパール人であることを誇りに思っている。父親として子どもたちにはネパール人としての誇りを忘れないでほしいと願っている。エベレスト・インターナショナル・スクールは、それをかなえてくれる学校である。しかし、妻や子どもたちは、ネパールよりも日本で生活することを希望している。家族の間で考え方が多様化していく中、夫として、また父親としてどのようにこれからの家族の生活を考えたらよいか悩みどころである。家族にとって、子どもたちにはネパールの伝統や文化を身につけさせ、一方で日本の社会を知ることをバランスよく教育することが妥協点となるかもしれない。現在、妻と子どもたちは、カトマンズの母親の介護のために一時的に帰国しているが、母親が健康を取り戻して妻と子どもたちが東京に戻るころには、もう一度家族のあり方を考えることになるだろう。家族間の価値感を調整し、バランスを探りながら暮らす B さん家族の姿は、外国ルーツの家族が日本で安定して暮らす際の参考になるのではないだろうか。
　ネパール人はお金を稼ぐことに忙しく、コミュニティ作りには興味がないと G さんは返答していた。日本で長期的に仕事をするのであれば、同じ民族の交流は、日本での暮らしの質を上げるため必要であるように感じた。

3. インタビューから見えるニーズ

　8 名の保護者個別インタビューを通して、それぞれの家族に来日することになった個別の理由があることがわかった。本稿では、インタビューから見えてきた来日後の生活のニーズを取り上げる。

(1) 日本語学習に関わるニーズ

　保護者の多くは来日前に日本語を学ぶ機会がないまま日本での生活を始めている。来日後に日本語のニーズを感じており、日本語教室など日本語を学べる場所や日本語の自己学習の方法について情報を欲している。FGI でも挙げられていたように日本語を学ぶ上で、家や仕事場から近いこと、自分の時間に合わせやすい、負担感のない授業料であることを条件としている。

(2) 学校教育に関わるニーズ

　学校に転入する外国ルーツの子どもへの日本語習得の支援に加えて、保護者が日本の学校を理解しておく必要があることがわかった。インタビューから、次のようなニーズを挙げることができる。1)教科学習に必要な日本語獲得のための日本語指導（能力に応じた指導内容と時間）をしてほしい、2)保育園から小・中学校までの保護者オリエンテーション（入学準備、学校行事、宿題、連絡方法など）があるといい、3)転入する外国ルーツの子どもの適応課題に対応してほしい(相談支援体制)、4)日本人保護者と外国人保護者の交流を促進してほしい。

(3) 暮らしの情報・災害・相談のニーズ

　インタビューを通して暮らしの情報について次のようなニーズが挙げられていた。1)

生活する上で知っておくべきこと／知っておいた方がよいことを教えてほしい、2)杉並区の暮らしについて知っておくべきことの情報を知りたい、3)公的制度・サービス（出産・子育て支援、保険、医療、就労、税金、年金制度）を学びたい、4)知りたい公的サービスにアクセスできるようになりたい、5)災害時に適切な行動がとれるようにしたい、6)相談しやすい窓口がほしい。

(4) 交流・居場所のニーズ

人とコミュニケーションをしなくても生活が成り立つ都会において、生活を始めた当初、人と知り合うことが難しかったという声が聞かれた。特に近所に住んでいる人と知り合いたい、同じ立場の外国人住民と知り合いたい、自分も地域でできる活動に参加してみたい、というニーズがある。

第 3 章　支援団体・機関関係者個別インタビューの実施と結果

外国人および外国につながる子どもたちに関わり、区内で支援している団体・機関へのインタビューをおこなった。インタビュー先と実施日は、下記のとおりである。

1. インタビュー先支援団体・機関と実施日

	団体・機関名	実施日
1	多文化共生センター東京　杉並校	3 月 26 日
2	すぎなみ協働プラザ	3 月 26 日
3	荻窪高校	5 月 9 日
4	学びのフレンドリースペース（フレスペ）	6 月 12 日
5	馬橋小学校	7 月 26 日
6	杉並区交流協会	7 月 29 日
7	杉並区文化・交流課	7 月 30 日
8	杉森中学校	7 月 31 日
9	杉並区教育委員会	8 月 2 日
10	杉並区社会福祉協議会	8 月 23 日
11	エベレスト・インターナショナル・スクール	11 月 28 日

2. インタビュー結果

日頃区内で教育、社会福祉、街づくり、国際交流を通して外国人区民に関わりのある 11 団体・機関の合計 13 人への個別インタビューを通して、外国ルーツの子どもと家族についての意見や課題を収集した。

(1) 外国につながる家族の特徴について

1）両親が共働きである家庭が多く、子どもが多い家庭では、上の子が下の子の面倒をみているケースが多い。また、子どもたちは親不在の中、自分たちだけで過ごす時間が長い傾向がある。

2）多くの家庭が日本に来てから数年以内で、生活に慣れていない。

3）親の職業は飲食業や工場勤務が多く、長時間労働で子どもとの時間が少ない。

4）言葉の問題というよりも保護者の勤務時間と合わないため、保護者とコミュニケーションを取ることがとても難しい状況がある。

5）家庭に留まる母親が、社会と隔絶されることで孤立しやすい。

6）カースト制度の影響で、親同士の支援グループを作るのが難しい場合がある。

7）移動する家庭も多く、子どもたちの教育環境が安定しづらい。

(2) 外国につながる子どもの日本語と学校の関わりについて

1) 子どもの日本語レベルは、学校側の求めるレベルまでに至っていない現状がある。例えば、外国につながる子どもたちが義務教育（小中学校）で身につける日本語レベルでは、高校での教科学習には不十分な状況がある。

2) 公立学校での日本語指導の時間数だけでは不足しているため、子どもたちの日本語力の向上に限界がある。学年ごとに求められる日本語を習得できるよう目標設定される必要がある。

3) 学習では、生活経験が活かせる教科（社会、理科）に苦労する子どもが見受けられる。

4) ある学校現場では不登校の件数（日本人を含む）が非常に多く、いじめの問題も深刻であり、学校側（教員・学校運営委員会）は、その対応に追われている。外国にルーツのある子どもや障がいを持つ子どもたちは配慮される必要があるが、学校側は合理的に対応するには難しい状況にある。

5) ある学校では、外国ルーツに関係なく、どの生徒でも課題があれば、ひとりの生徒として対応している。さらに、学校を多文化共生や多様性を尊重する場にするには、人材が不足している。

6) 子どもは家庭では母語、学校では日本語を使う場合が多く、言葉の定着が不安定になる傾向がある。日本語も母語も不十分な状態で育つ子どもが多い。

(3) 親と学校のコミュニケーションの難しさについて

1) 文化や生活習慣の違いから、保護者、子どもの両方がまず日本の学校生活や学校制度を理解できていない。

2) 子どもの学習や安全のために、子どもの日本語レベル、生活上必要な文化的な配慮など、保護者との情報共有が非常に大切である。

3) 教育委員会、小学校、中学校、高校などは、外国ルーツの家庭の課題を十分に認識できる状況にはない。

4) 子どもにも、保護者にも日本語学習だけでなく、日本についての理解を深めてもらうことが必要である。

5) 日本語での面談、連絡帳、お知らせでは意思疎通、情報伝達が難しい。手続きが煩雑で親には丁寧な支援が必要である。

6) 親が地域の情報を得られず、学校との関わりや連携が不足しがちである。

(4) 外国につながる家庭の抱える生活困窮リスクについて

1) 衣食住の確保、就労に関わる相談がある。在留資格によって、公的サービスを受けられない人たちからの相談から、相談できる知り合いやコミュニティがないために地域で孤立することを危惧する。

2) 制度利用に制限がある人へのセーフティネットの支援は、行政と民間の協力だけでは難しさがあるため、日常生活上の幅広い課題への対応は、地域の包括的な連携が必要だと感じる。

3）言語、税、国保についての相談が多い。ただし、日本に住んでいる年数によっても相談の内容について違いがある。

4）家主が外国人にはあまり物件を貸したくない場合が多いように見受けられる。その他、子どもの教育手続き、銀行の口座開設、病院での専門用語を理解するのに苦労している。

5）生活費や学費の負担が大きく、公的な支援が必要な家庭が多い。

6）親が医療や行政サービスの利用方法を知らず、適切な支援を受けられていない。

(5）外国につながる家庭と地域社会の関係について

1）地域との交流が少なく、外国人コミュニティ内で情報共有する傾向がある。日本人の近隣住民と関わることが難しい。

2）文化の違いが理解されず、外国人に対する偏見や対立が生じることもある。

3）日本人と外国人の間の「共生」の認識にずれがあり、関係を築くことで認識が変わっていくこと。

4）条例などにより行政ができないところは、民間と連携する方がよい。行政と民間で線引きをするのではなく、どこまではやれるが、どこまではやれないということを理解し合い、知恵を出し合ってやっていくのがよい。

5）外国人の情報の取り方・捉え方について改善できるとよい。行政が外国人自体に直接に情報を伝えることは重要だが、外国人を支援する団体と良い連携ができれば、外国人に行政の情報を届けやすくなると思う。

6）母国の文化を維持しつつ、日本の地域社会になじむためのサポートが求められている。

3. インタビューから見える対応状況

子ども・保護者と直接に接点をもつ支援団体・機関は、最大限の対応をしているように見受けられる。一方で、法制度や社会環境などによる制約があり、さらに家庭の状況まで十分に把握することは難しく、子ども・保護者が求めるニーズに十分には対応できていないのが現状である。

(1）教育関係

1）外国ルーツの家庭の課題を十分に認識できる状況にはない。

2） 日本語での面談、連絡帳、お知らせでは意思疎通、情報伝達が難しい。（手続きの煩雑さも障害となっている）

3）保護者の勤務時間と合わせるのが難しく、保護者とコミュニケーションを取ることが非常に難しい状況にある。

4）子どもの日本語レベルが学校側の求めるレベルまでに至っていない場合、十分な教科学習を提供できない。

5） 公立学校での日本語指導の時間数(120 時間)だけでは不足しているため、子どもたちの日本語力の向上に限界がある。

6）学校現場では不登校の件数（日本人を含む）が非常に多く、いじめの問題も深刻であり、その対応に追われ、合理的に対応するには難しい状況にある。

7）外国ルーツに関係なく、どの生徒でも課題があれば、ひとりの生徒として対応している学校もある。しかし、今よりさらに学校を多文化共生や多様性を尊重する場にするには人材が不足している。

（2）生活サポート関係

1）衣食住の確保、就労に関わる相談を受けている。

2）制度利用に制限がある人へのセーフティネットの支援は難しい。

3）言語、税、国保についての相談を受けている。

4）家主が外国人にはあまり物件を貸したくない場合が多いように見受けられ、それ以上のサポートはできない。

5）子どもの教育手続き、銀行の口座開設、病院での専門用語を理解するのに苦労している様子が見受けられる。

6）医療や行政サービスの利用方法を保護者に十分に伝えられていない。

全体のまとめと提言

本調査研究の第 1 部では、外国にルーツのある子どもの保護者を対象に「言葉」「生活」「教育」「居住」に関するアンケート調査の結果から、調査研究チームとして現状を把握した。また、外国にルーツをもつ子どもの保護者 6 名に集まってもらい、アンケート調査の結果から課題を探った。

第 2 部では、外国ルーツの子どもの保護者 8 名への個別インタビューを実施した。それぞれの家庭の来日背景は多様であることがわかった。杉並区内での生活に概ね満足はしているものの、日本語のコミュニケーション、子どもの教育、保育所や学校、地域のつながりにおいてニーズがある。さらに、杉並区内で外国ルーツの子どもや家庭に関心や関わりをもっている団体および機関に所属する 11 団体 13 名に個別インタビューをおこない、外国ルーツの子どもや家庭への支援や対応の現状を把握した。

アンケート結果および支援関係者の意見を参考にし、外国ルーツの子どもの保護者を対象とした FGI および個別インタビューから明らかにされた課題とニーズをもとに、杉並区における今後の多文化共生社会の推進に資すべく提言をおこなう。

1. 外国ルーツの子どもたちの学校などでの日本語習得の機会を充実させる

学校での学びにおいて学習言語としての日本語を習得することは、外国にルーツのある子どもの教育を受ける権利を保障する上の前提であるといえる。本研究では学校教育の現状から限界があることを確認した。他方、学校外での日本語教室および補習教室などの取り組みも進められている。学校内外での取り組みがさらに充実していくことが求められる。具体的には、以下のようなことが検討されていく必要があるといえる。

① 日本語習得の機会の保障と常勤の日本語指導者の公立学校への配置【行政・立法】
② 教科学習に必要な日本語獲得のための日本語指導の充実(能力に応じた指導内容と時間)【学校・行政・立法】
③ 大学生(日本語教育専攻の学生含む)による子どもの支援活動の推進【大学・学生グループ】
④ 日本語の学びの効果的な方法や資源についての情報共有【行政・NPO ほか】
⑤ 杉並区内の他の日本語教室との連携強化【NPO・ボランティア】

2. 外国ルーツの子どもの保護者の日本語習得を支援する

外国人にとってのいわゆる 3 つの壁（言葉の壁、制度の壁、心の壁）の一つ、「言葉の壁」への対応である。杉並区に生活する外国ルーツの人々にとっても同様に、日本語は生活上の壁である。保護者にとって日本語を習得することは、子育てや社会生活を営む上で大切なことである。すでに、杉並区内には、日本語を学ぶ場所は存在する。多様化している日本語学習手段の活用方法を当事者に伝達すること、および関係団体の連携が求められる。

① 日本語の学びの効果的な方法や資源についての情報共有【行政・NPO ほか】
② 杉並区内の他の日本語教室との連携強化【NPO・ボランティア】

3. 外国ルーツの家庭と学校などのつながりを促進する

外国ルーツの保護者は、日本の保育所や学校文化がわからない状況のなかで、子どもたちを就学させている。学校の仕組みや行事など基本的なことを理解できるような関わりや工夫が学校に求められている。個々の教育や支援現場ですでに取り組まれていることも多々あるといえるが、外国ルーツの家庭と学校などが効果的なつながりをもてるような、質の高い取り組みを促進することが求められる。

① 保護者が参加できる子どもの教育や進路選択に関する情報交換の場の設置【行政・NPO・ボランティアほか】
② 保護者に対する学校に関するオリエンテーション(入学準備、学校行事、宿題、連絡方法など)の充実【学校】
③ 転入学する外国ルーツの児童・生徒の適応課題への対応(相談支援体制)【学校・NPO・ボランティア】
④ 外国ルーツの子どもの家庭と学校間のコミュニケーションの改善【学校・NPO・ボランティア】

4. 外国ルーツの人々のための暮らしの情報へのアクセスを支援する

外国から初めて日本に来て生活する場合、日本の生活に関する情報はほとんど持っていない場合が多い。言葉の問題や知り合いがいない状況の中で、公的な情報へのやさしいアクセス方法や基本的な生活情報に関するオリエンテーションがあると新しい生活のスタートの助けになる。外国ルーツの家族にも多機関連携による支援は欠かせない。

① 外国人居住者向けの多言語での情報提供（SNS 含む）や相談サービスの充実【行政・NPO・ボランティア】
② 外国人が知りたい公的サービスへのアクセス情報の提供【行政・NPO・ボランティア】
③ 災害時、外国人が取るべき行動の周知【行政・NPO・ボランティア・地域住民ほか】
④ やさしい外国人相談窓口の拡充【行政・NPO・ボランティアほか】
⑤ 外国ルーツの子どもの家庭の困窮リスクの把握と地域対応【地域住民・行政・学校・NPO・ボランティア】

5. 外国ルーツの子どもや家庭の、地域の一員としての交流・参加を促進する

外国にルーツのある家庭にとって、近所づきあいのきっかけを見つけるのが難しいという声があった。また、外国にルーツのある子育て中の親が参加しやすい交流の場や自分の活動の場などを求める声もあった。地域の一員として参加できる場や役割を見つけられる

と、多文化共生に向けた地域交流が促進されるであろう。

① 日本人保護者と外国人保護者の交流の促進【学校・NPO・ボランティア】
② 生活する上で知っておくべきこと／知っておいた方がよいことの情報提供【行政・NPO・ボランティア】
- 杉並区の暮らしについて知っておくべき事柄の情報
- 公的制度・サービス(出産・子育て支援、健康保険、医療、就労支援、社会保険、税金)の情報

③ 近所に住む人との交流機会づくり【地域住民・学校・NPO・ボランティア・大学】
④ 外国人住民（民族）との交流機会づくり【地域住民・学校・NPO・ボランティア・大学】
⑤ 地域で活動する機会づくり【地域住民・学校・NPO・ボランティア・大学】
⑥ 外国人家庭のコミュニティへの参加促進および外国ルーツの子どもの個性を体現する機会の提供【地域住民・学校・NPO・ボランティア・大学】
- 地域での多文化共生イベントの企画検討
- 子どもたち同士の交流機会の創出

⑦ 国際交流や教育支援に関心のある地域住民へのボランティアセミナーの実施【NPO・ボランティア・行政】

おわりに

本調査研究全体を通して、外国ルーツの子どもの保護者の声を聞き、当事者の視点を大切にしてきた。ただし、アンケート回収率が低く、また FGI および個別インタビュー協力者の杉並区での居住年数は浅い傾向があった。そのため、杉並区に住む外国ルーツの子どもの保護者全体の状況を把握するためのさらなる調査が必要である。

また、今回の調査は保護者を対象としたものであり、子どもたち自身から情報を得ることは叶わなかった。今後は子どもたちの声が直接、反映される調査がなされることも期待したい。また、今回は困難な状況にある家族を調査対象に含めることができなかったため、そのような家族にリーチしていくことも課題としたい。

本報告書が、外国ルーツの子どもと家族が杉並区で夢や希望のもてる暮らしを考える手がかりとなれば幸いである。

添付資料：

資料 1　アンケート調査依頼書（6 ヶ国語）

資料 2　アンケート調査質問票（6 ヶ国語）

資料 3　インタビューガイド